

# 定子と彰子の物語（後篇）

高田 友

道長、一旦屈服せしめたる敵には極めて寛容、怨恨を残さざるを以て身上とす。その馳走によりて、伊周も隆家も、翌年には京都に召喚せられ、罪を許さる。もはや道長に阿諛するの外なしといへども、漸くに昇進し、一〇〇八年には、儀同三司に任ぜらる、「儀を三司（三大臣）に同じうす」の意にて、大逆の罪を犯したるに不可思議なる高位に至る。小倉百人一首作者に「儀同三司母」とあるは、伊周母高階氏の謂ひなり。

隆家も、後年、再び台閣に連なる。一日、朝廷より退下せんとするとき、道長これに目を止めて、己が牛車に招き、ともに家路を辿る。道長、懷舊譚に耽りつつ、切々と語りて曰く、「長徳のをりは、遺憾なる結末とこそはなりたりけれ。陷奔に嵌められたりけんと疑ひたまふなかれ。磨は汝兄弟を救はんと盡力したれども、餘りの大事にて候へば、つひに如何ともするなかりき。遺恨を含みたまふなかれ」と。宜なるかな、君を弑せんと欲して、僅々一年にて赦免ありたるは、道長の配慮、寛宥なりと言はざるべけんや。さはさりながら、これが儀は、定子の皇女を生みたまひける慶事のゆゑなりとの裏話あり。

九九九年、道長女彰子（十二歳）、女御となりて入内す。主上二十歳。已而、定子（二十三歳）は中宮たり。然れども、道長の權勢旭日の中天に昇らんとするが如くにして、翌一〇〇〇年には、彰子を定子に並べて立后せしめんとす。

中宮とは皇后の異名なるに、今、道長は、己が娘を冊立せんがために、皇后と中宮を分離して、定子を皇后に棚上げし、空位となりたる中宮の位を我が娘を以て補ふ。一天皇に正妃の二人あるを以て「一帝二后」と稱ふ。

この年末、定子は媼子内親王を出産し、産後の肥立ち便なきを以て、芳紀二十四にて早世す。帝は二十一歳、彰子は十三歳なりき。

定子は、脩子、敦康、媼子の三子を残す。

荒唐無稽の如くに聞ゆれども、定子所生の皇子皇女を養育したるは道長の係累なり。嫁は憎くとも孫はかはゆしといへり。兩皇女は東三條院詮子これを傍らに置いて溺愛せんとすれども、翌一〇〇一年には祖母四十歳にて逝世す。

敦康は道長と彰子と相提携して、これが哺育に任ず。あまつさへ丁重に傳くこと限りなく、敦康は容姿・學才・心映、極めて優れたる皇子に成長せり。彰子は我が子よりも慈しみたりとの由。源氏物語の桐壺を定子、源氏を敦康に比定する説あり。然則、彰子は藤壺なりや。それがし、ふと、敦康の彰子に思ひを寄することなかりしかと夢想するの儀あらずんばあらず。彰子と敦康の齡、懸隔すること僅々十一。天の采配如何なりしにや、定子と彰子の齡も十一の違ひなりき。

道長の、敵ならんとも、一旦脅威薄るれば、すなはち舊怨を棄てて入魂たるは獨り伊周隆家のみならず、敦康にもまた然り。一には、彰子一〇〇八年に敦成親王（後一條）、一〇〇九年に敦良親王（後朱雀）の御誕生を見る以前は、外孫誕生のことなからんか、すなはち敦康を登極せしめ奉りて、外戚たらんと企みたるにあらずや。

一條帝は、一〇一一年病を得て、從兄三條天皇に讓位し、幾何も經ずして崩御あらせらる。三條帝

は冷泉皇子におはしませども、これまた道長の外甥にして、姊・超子の所生なり（花山異母弟）。同母の皇弟に、和泉式部と浮名を流したまひし爲尊親王、敦道親王あり。

三條帝の踐祚に當り、道長は敦成をして立太子せしめ奉る。このとき、彰子は、我がライバルの所生たる敦康こそ長兄なれば皇嗣たるべけれと異を立つれども、道長意に介するなし。彰子父を甚だ惡みたりと傳へらる。一條帝の素志、敦康に在りと承知したるに據りてこれを推したりとは彰子の慈悲の深きぞ察せらるる。

彰子のかく寛厚なりしは、一重に、傍らに紫式部ありて、教へ諭せるのゆゑなりと言ふ。式部の彰子に仕へたる始めは一〇〇六年（彰子十九歳）と傳へらるるが定かならず。清少納言とは直に相識るなきが如し。一〇一二年に致仕したるは、道長、己が陰謀に彰子の加擔するを厭ふは式部の使喚せる所なりと憾みて讎首せりとの由。

敦康親王は、道長嫡子頼通（敦康より七歳年長）と肝膽相照す仲となり、頼通正室（具平親王女隆姫）の妹を室に迎ふれども、一〇一八年、二十歳にて夭折す。

道長薨去は一〇二七年（六十二歳）。上東門院彰子は長壽を保ち、一〇七四年曾孫白河帝の御世に八十七歳にて崩御あらせらる。すなはち今日皇室直系の祖にておはします。

（平成三十年三月十五日受附）